

玄關に弟の買つた自転車が吊り下げてあつた。

新らしいハンドルが少し曲つてゐた。

弟の左の肺の結果を表はしたものに違ひない。

僕はそれを乗り廻した。

畦を傳ふて、幼馴染の女の所へも行つた。

神經質な目をした顔立の好い女の寫眞が、アルバムに挟けてある。

聞くと一里ばかり山奥の、一軒家の孤兒だと言ふ。

僕はホクロの姉の家へも行つた。

『大阪で何處に居るか解らないで、そんな冷淡な事で、あなたが危篤にでもなつた場合弱るでせう。』

『放つて置く積りもありませんが、今に住所が解りましたらお知らせします』

姉は言つた。

大法寺か壽座で、野田とも話したのだが、一度ダ、演説會を開かうと思つてゐた。